

徳川将軍の御成と美術

ロンドン大学東洋アフリカ研究所 (SOAS, University of London)
美術史・考古学部 (Department of History of Art and Archaeology)

博士課程 平木しおり

この発表では、徳川 5 代将軍綱吉 (1646 – 1709) の御成で贈答に用いられた美術品を扱う。政治的な文脈で論じられることの多い 2 代将軍秀忠と 3 代家光の御成に比べて、綱吉の御成は個人的な趣味や嗜好が式次第に反映していると言及されることが多い。しかし、綱吉の御成に対する評価は、「犬公方」として揶揄されることもあった権力者ゆえの、偏った評価ではなかったか、綱吉には彼なりの戦略があって御成を行ったのではないか、という疑問を持ち、綱吉の御成を研究対象とした。

そこで、最も人間関係が反映される行為の一つである贈与に注目して大名家の記録や幕府日記を調査したところ、綱吉と大名らが贈り合ったものの中には名物の茶道具が含まれていることが判明した。災害や戦災で失われたものもあったが、そのうちの数品は国内に伝世している。しかも、綱吉が受け取ったものは、名物の道具の中でも特に古い伝来を持つものや、以前徳川家から他の大名へ渡ったものだった。御成での名物茶道具の贈与は、将軍にとって意味のある名物を巧みに吸い上げるものであると同時に、大名にとっては名物を下賜されることで、ものの伝来に将軍家に連なることができる。これらの道具は、次に将軍へ献上する機会以外に大名家から出ることはなく、また他へ売り渡すなど論外であった。いわば武家の共有財産ともいえるような名物の茶道具の贈与を行うことで、5 代将軍と大名は関係を深めていったのだろう。

茶道具と対照的なのは刀である。記録を見ていると、刀の記述は、刀工銘、寸法、値段 (折紙) の 3 つが揃って記載されていることが多い。名物の茶道具と比較しても圧倒的に数が多いと思われる刀を識別するには、これらの情報が不可欠という事情もあるだろうが、発表者は値段が書かれていることに注目している。確かに刀は武士の象徴ともいえる品物だが、値段がつくということは市場に出すことができるということでもある。刀は贈答品であると同時に商品でもあり、状況次第では市場を半永久的に回り続ける品物であった。もちろん、名刀と呼ばれて各家に保管される刀の存在を否定するつもりはないが、茶道具と比べたときに顕著なのは、商品としての価値である。